
ARROW!!

ま ゆ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ARROW!!

【Nコード】

N4253D

【作者名】

まゆ

【あらすじ】

4月から高校生！そんな空奈を突然の1人暮らしをさせることにした家族。大阪で出会う、アパートの温かくて、個性的で、楽しい、そんな5人との出会いと共に成長していく主人公を描いています。時には、おもしろく時には切なく、時には魅せる、そんな主人公と一緒に、1人暮らしを体験してみませんか？

A R R O W ! ! - 1 - 始（前書き）

文章力はありませんが、自分なりに書いてます。
あなたにとつての「矢印」はなんですか？

A R R O W ! !

[illegible]

私の進むべき道の矢印は、ここがスタートでした。

[illegible]

私、桜井空奈は生まれた。

現在

3

卒業式を終え、友達と5時間のカラオケとプリクラを撮って「最後」を 痛感した。みんな、小学校・中学校と9年間を過ごし、2クラスしかないこの学校でケンカしたことや、先生に内緒でプールに忍び込んで遊んだこと、たくさんの思い出が涙として、あふれた。

そして、いつもの帰り道のように十字路で

「ばいばい」して、家に帰った。

家についたころは7時を回っていて

さすがに、怒られるかなあって思いながら帰ったら 何故かみんな、客間に集まっていた。

ばあちゃんとじいちゃんが両方居て、お母さんと

お父さんも居て、弟も、何故かみんなそろって 机に広がったチラシや

パンフレットを開いている。

「・・・ただいまあー」

いつせいにみんなの目が私の方を向く。

すると、みんなして にやにや笑いながら 私を見るなり

「あ！お帰り！ あんたも見てみい」

お母さんのソプラノ音が部屋中に響き渡る。

「やっぱり、キッチンもトイレもお風呂も付けなあかんでなあ、ココか

ええんちゃう？」

ばーちゃんが問う。引越してもするのかな。

「ちよつと、空汰！」

弟の名前を呼ぶ。そしたら、エラそうに

（メ、）チツ　まさにこんな感じで「何？」と答えた。

「え、引越してもするん？」

「え？姉ちゃん知んの？」

全くこの状況ができない私を察した弟がまた言う。

「姉ちゃん、春から大阪で1人暮らしするんやろ???」

ええええええええええええええええええええええ？！

ｓ
 (、
)
 ｓ
 どんだけえ
 ｓ
 ちよっ

と言ってみたかった。

「よし！！！！！！！！ここで決まりっ！」

おとーさんが1枚のピンク色の紙を差し出してきた。

見れば、キッチン・風呂・トイレ付き 2LDKの新築アパート。

名前は「ARROW」。

「空奈、よく聞くんやで？ あんたはな、こんなあつたかい人らがいっぱいの

街に生まれて 何不自由なく暮らしたやろ？ でもな、あんたも

1人で生きて

いかなあかんねん。 いつまでも、人にあまえて生きるんはいかんって自分でも

わかるやろ？ だからな、大阪行きい。仕送りは毎月送るで。な？」

そんなこと言われてしまつては断れない。

どっちにしろ、本音はこんな「田舎」で一生暮らしたくなかった。

農家の人と結婚して、子供生んで、農業を楽しむ、そんな生活

絶対嫌やつて思つてたから。ここは、どうする？ どう回答しようか。

「田舎なんか居たくなかつたしありがとう！おかあさん！」いや、こんな

こと言つたら どうなるかわからない。

「アリガトウ オカアサン」 誰？ んー、よし。これで行い。

「・・・ うん、あたしもずっと思ってた。ありがとうなオカアサンッ」

やばい・・・最後のほう「アリガトウ オカアサン」の言い方まじった；

「よう、決意してくれたなあ 空奈。おじいちゃんすごい嬉しいでな。

しゃーないで、じいちゃんからも5万くらい祝いつつんだるでな
^^」

(´・*´)ノ ヤッタよ、 オカアサン！

「ありがとう、じいちゃんっ あたし頑張る！」

つくづく、桜井家の皆様は人が良い。そこも良いところ
だけど、

気をつけようネ。

「出発は明日だよ。朝1の電車で行くからね。空奈の荷物はもう送ったからね」

この、桜井家の中でたった1人 標準語に近い言葉で喋るのは

お父さんのオカアサン。

居なくなります^^

明日、この田舎から 桜井 空奈

ARROW!! - 2 - へ続く。

ARROW!! - 1 - 始（後書き）

感想よろしく願いますっ

ARROW!! - 2 - 立

田舎から大阪へ行く日。

家族・親戚・友達が来た。ム力つくコトに

弟は彼女を連れてきた・・・。

ARROW!! - 2 - 立

「・・・ちよつと待って、こんなに駅に入ってきたら迷惑やんか」

「空奈ちゃん、顔も綺麗になつてえ」

たぶん、ばーちゃんの畑仲間の大倉さん。

「おばちゃんだけやわあ、ンなこと言うてくれるんわあ」

いや、あんたに言うてないやろオカアサン。

「空奈あ あたしも連れてつてえやあ」

未来い・・・ ありがとうなあ；

「未来ちゃん、元気してるー？ 今日、おばちゃんからあげしたるでなあ」

もう、そろそろ行きたいところなんですけど。

。。

「んじゃあ、最後にみんな写真撮るかあ、現像できたら空奈ちゃんにも送るであつ！」

寂しい時、写真はすごい力になるでな。よし、おっちゃん駅員さん読んでくるで

待つときい」

井上のおじちゃんはカッコいいこと言つてどっかへ行つた。

こんな田舎をバックに写真を撮るの久々やな。

「連れてきたでえ」

「どうも、どうも^^」

いかにも駅員さんな雰囲気、駅員さんを連れてきたおっちゃんは遠慮なしに駅員さんにカメラを渡して、自分の位置につき、ピースしている。

『でわでわあ？ 桜井家の長女「桜井 空奈」の1人暮らしの記念に1枚ッ！

いいですかー？ 4引く2はあ？』

「「「「さああああああんっ (3)「「「「

お決まりの、フレーズ（一般的に4引く2は 2ですよネ。）を言
い、

田舎の暑苦しいくらいの人情にひたった。

．．．．「6番ホーム、新大阪行き」

「んじゃあ、行ってくるワ」

「なんや、ちよつと悲しくなってきた。」

「まあ、達者でな。」

「たまには電話してやあ」

「ばいばーい」

「明日の晩ご飯はおむらいすがいいなあ」

「ばいばい、ぶす」

「んじゃあねえ^^」

「See you!」

「ぐつど らつく」

「かつ．．．空奈あああ」

意味不明なお別れの言葉に笑顔で電車に乗った。

「」 & a m p ; # 9 8 3 6 ; & a m p ;

9 8 3 6 ; 電車が発車いたします」

『空奈ああああ！！！！！！！ご飯ちゃんと作るんやにいい？！？
！？！』

「また、しゃーないから遊びに行つたるでなあ！」

何やらいろいろ叫んでたけど聞こえたのは15年間育ててくれたお

母さんと

弟の声が聞こえた。お父さんはもとのんびりした人だから笑顔で

手を振っているのがかすかに見えた。

指定席に座り、部活で県大会出場祝いで買ってもらった赤いiPodを耳につけ、新居のチラシを見た。

『大特価！！！！ラスト1部屋 家具・家電 キッチン・トイレ・お風呂！

外壁は、今風のたまご色で塗られ、フランス・パリのような仕上がり

なっております！是非、お電話下さい！』

ほう・・・「フランス・パリ」のようになってめっちゃ怪しいけど、ボロじゃないんだったらいいや。新築だし。そんなことを思って、長い道のりをお気楽に寝た。

「次は、新大阪ー 新大阪ー。」

着いた。・・・人いっぱいあつ

とにかく、地下鉄に乗り換えて まい にゅー はうす へ（・）

地下鉄から降りてトホ30分。
しばらく部活やってなかったからめっちゃキツい。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

え、ココ?????.....

地図を見直してみる。

やっぱり、ここじゃ.....。

ARROW!! - 3 - へ つづく

ARROW!! - 3 - 人

地下鉄を降りて 徒歩30分。

そこに見えた 私の新居であろうアパートと4人がお出迎え。

チラシ通り、フランス・パリ風だった。

こんな所に住んでいいんですか？

ほんまにここ、あたしの家ですか？

ARROW!! - 3 - 人

「えーっと、桜井さん？」

茶髪のボブで今時のかわいらしい20代前半くらいの女の子の人が喋ってきた。

「・・・はい、そうです。」

お願いやから、人違いであってほしい。

「うせやんつつ！めっちゃかわいい よろしくなあ 空奈ちゃん
っ」

何やらホストNO.1みたいなカッコいい人が、あたしの名前

を言う。

やっぱり、間違えじゃないんや。。。。

「んー、よろしくな。うん。」

この人 めっちゃかわいい・・・猫みたい・・・プーマのジャ
ージを履いて

サンダルはエルモで。男の人やけど、めっちゃあつたかそう。

「初めまして^^」

「えっと、初めまして……桜井空奈です……！好きなものは焼きぶりんです！」

「今日からよろしくお願いしまふ！」

・ ・ ・ 　　「お願いしまふ」って涙

「なははははははははははっ！……！！」
焼きプリンにお願いしまふ
！かわいいコやわ（笑）

えっと、安田帆奈津ですっ！！年は にじゅう・・・%
？！です

「ネイルサロン経営してますっ！」

あー、めっちゃかわいい

「おもしろい子やなあ！（笑）えと、オレは村上蛭でふ！（笑）ほたるって女やないで！」

あ、ちなみに23歳で
ホストやってます
って言いたところ
やけど（笑）

プロカメラマンやっています」

ホストやないんやw

「んー？オレえ？ 田中龍ですー。んー？20歳ー。弁護士やっ
ますー。」

ゲーム好きです。おれは焼きプリンより抹茶プリン派ですー。」

やばい、かわいいなあ^^

「えっと、オレは大谷 晴です！！大学生でコンビニでバイトし
てます

19歳やでえ^^」

うわー、この人もまた、天然羽毛布団みたいな存在やあ（？）
ふわふわしとるなあ。

「えっと、大家はあたしでこの名前は「ARROW」。意味分か
る？」

「・・・？ えー、何なんですかあ？」

「矢印。自分の行く先を見つける場所になればいいなって思っ
て^^

全部で6部屋あるでな^^ 空奈ちゃんは2回の真ん中の部屋。」

「あ、そーゆーのめっちゃ好きですw え、あたしが6人目ですよ
ね？」

「うん、そうやよ^^ あ、もう1人おるよ（・）もうちょっ
とで帰ってくると

思うでw夜、空奈ちゃんの歓迎パーティーあたしン部屋でやるで

おいでなあw」

「んじゃ、部屋片付けてきますねえ」

「うん あ、これこの案内図wあたしが作ったからw」

あー、帆奈津さんめっちゃかわいいし良い人やなあ

てか、春休みあけたら学校や； 友達いっぱい作ったるでなっ！！！！

階段をかけあがり104号室の鍵を開ける。

がちやつ

・・・

期待通りのかわいらしい内装に奥にはダンボールが積んである。
1人分やから、ちよつと少ないけど ここで今日から始まる。

ある程度荷物を片付けて自分の部屋って感じになった。

ふいにベットに倒れこんで一息ついた。

4月から始まる学校も、今日から始まるこのアパートでのコトも
すべてが嬉しくてすぐつたい、そんな気持ちで思わず

顔がニヤける。

帆奈津さんが作ってくれた案内図を見ると、

2階 103 龍たる 104 空奈ちゃん 105 友来くん

1階 100蛍ちゃん101帆奈津^{アタシ} 102晴

龍たるの本名は龍です！ 笑

隣は龍さんと・・・ 友来？くん？

あ、おらへんかった子かな。

「くくく」

ケータイが鳴る。画面を見たらお母さんだった。

「もしもし？」

「あ！空奈か！おかんやけど！ 着いた？着いたな！今日、そっちの高校の制服とかいろいろ送るでな！わかった？よし、んじゃね。ご飯ちゃんと食べないな！ばいばい！」

「くくプッ」

「くく」

電話で自問自答すんなよ 笑
思わず笑みがこぼれる中

「くくピンポン、ピンポンピンポン！……！！……！！……！！……！！」

うつさいなあ（怒）誰やねん！

「は……い……！！……！！」

ん？

んんんんん？？？

ん。

「どちらさん？」

「はあ？お前こそ人ん家で何してんねん！！！！出てけや！」

「どえうわつはあ？！」

「うっわ、日本人ちゃうんけ。」

「日本人じゃあほ——！！！！！！！！！！！」

「てか、自分だれやねん。」

「人のこと聞く前に自分の事言っんが礼儀やる！」

あー、めっちゃ腹たつ！ 誰やねん、ほんまに。

「おれか！おれはっ・・・」

「「「はーいすとつぷー！！！！！！！！」」」

「もう、下で配達してもらったピザのお金はらってたら、えらいでっかい声聞こえるで来てみたら！ てか、友来くんの部屋隣やる？あほー。」

「帆奈津さーんっ；」

「空奈ちゃんごめんね。」

「チッ すいませんでしたねえ お邪魔しましたあ（怒）」

「ケッ わかったらええんですー。このさる！」

「いちいちムカつくこといいやがって まる子！」

「なんやねん丸子って、あたしはちびまる子か！」

「そうじゃ！その身長びっくりじゃ！150もないんちゃうか？」

「152じゃ あほおおおお」

めっさ 腹たつねん。こいつ。

そんなこと考えながらも、帆奈津さんの部屋へ行く。

「お、空奈ちゃん来たなあ^^ いっぱい食べえやあ^^」

「ありがとう、蛍さん！　どこその猿とは全然ちゃうわあ」

「猿言うなサル。お前ちびまるやろが。」

「（無視）　龍さん、ビールいいですか？」

「お、ありがとうー、もらうわー。」

「空奈ちゃんオレにもー。」

「晴さん飲みすぎてんちゃいますー？笑」

「だいじょーぶ！おっちゃんまだまだいけるで」

「そういえば、空奈ちゃんと友来くん4月から一緒の学校やんなあ、
だって、小津高やる？」

「「ええええ？！」」

「お、ええなあ　高校生わつ　でも、空奈ちゃん楽やな！友来に
2ケツしてもらって

学校行けば？　やったなあ^^」

「ちょー、蛍さん待って！こんなんと2人乗りしたら学校着く頃には
オレ、死ぬワ」

「せやでえー、行ったりい。」

「うわああ；龍さんまでンなこと言うー。」

「オレ、入学式くらい車だしたるでえ」

「え、ほんま？！晴さんありがとう！」

なんか、あたし会話に入れてない・・・苦笑

さつきから、あのクソザルを中心に話が回つとる。

「空奈ちゃんと友来のやったら、みんなで入学式行こうや！
保護者席で」

「お、ええなあ^^ 帆奈津も行くやろ？」

「うん！当たり前やんっかわいいかわいいARROWの末っ子ちゃんやからなw」

そうして、ARROW入居 1人暮らしの初めての夜が終わった。

ARROW - 4 - に つづく・・・

ARROW!! - 4 - 温

バタッ

・・・

痛っ！ 誰やねん、あたしの足蹴ったんわ！！！！

「んーっ。」

やっぱり、コイツか。

ARROW!! - 4 - 温

昨日の、歓迎パーティーの後 結局皆で帆奈津さんの部屋に泊まった。帆奈津さんによれば、みんなが集まったら必ずこうなるから、気にしないでゆっくりしていつてね。と言ってくれた。お言葉に甘えて、リビングのソファで寝転がったあたしは、どこぞのサルに攻撃されて起きた。

帆奈津さんも、蛍さんも、龍さんも晴さんも サルもみんな寝ている。 今、7:30。 二度寝する？いや、起きるか。

うー、起きよう・・・。

皆が寝ている間に朝食を6人分作った。ベーコンエッグと、ごはんとドレッシングサラダらしきものを作った。皿にもりつけてたら1人「むくつ」と起きてキッチンに向かって歩いてくる。

『・・・おはようさん。』

あ、龍さんや!!!

「おっ おはようございますー^^」

相変わらずめっちゃかわいい（ ）

『んー？良いにおいする思て来たらご飯作ってくれたんや！。

ありがとうなー。』

「いえいえw あ、みんな今日から仕事ですよね、起こしてきますね^^」

なんか、2人でおるのは恥ずかしかったから

起こしに行くことにした私は、帆奈津さんと蛍さんと晴さんを起こしに、リビングへ行った。

「帆奈津さん、おはようございますー^^」

バタッ!!!!!!

急に起き上がったのはあたしの顔を見るなり、

『空奈ちゃん！おはよう！！ 今何時？！』

「7時45分くらいやと思いますよー」

『うわだえあえう？！ あたし8時には家出やなああ！！』

「あ、ご飯みんなの分つくつたんで食べてくださいね！！！」

『ほんまにー？！ありがとうな 』

「いえいえ^^」

寝癖のまんま バスルームに向かった帆奈津さん。
次はホスト顔の蛍さん。

「蛍さん・・・ 朝ですよ！！お仕事ええんですか？」

『んー？あー、うー。 』

「いや、ちょっと！起きて下さいって！！！！ ご飯できてますよ^^」

『ん？あーふー、ご飯何い？』

「ベーコンエッグとサラダとご飯ですよ^^」

『わーおいしそうなご飯をありがとーね。 んんんん・起きますか。 』

『あほか』

「ご飯とベーコンエッグとサラダと」

『サラダと?』

「お茶。」

『そこは、うそでもバナナとかさ?言おうよ。』

「（笑）」

そうして全員を起こして、食卓へ向かう。

さすが、大人の4人!!!!あの短時間で寝癖を直して雑誌で見るような服に着替えて（みんなめっちゃお洒落。）
「いただきます」するのを待ってた。約1名は寝癖・ジャージのまま、蛍さんに買い物物の約束をしていた。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

みんな、おいしいって言うてくれて 大人4人はそろってアパートを出た。もちろん、春休み中なあたしとサルは帆奈津さんの家を片付けて、自宅へ戻った。

帆奈津さんは、8:30~18:00までネイルサロン通常営業。

蛭さんは、 9：00～19：00まで雑誌の取材と写真集の撮影。

晴さんは、 8：30～19：30まで授業とバイト。

龍さんは、 9：00～13：00まで事務所勤務。

ぴんぽん

『はあああああいつつ』

誰かが、やってきた。

『こんにちはー、 ×宅配便でーす

印鑑か、サインの方お願いしてもよろしいでしょうかー？』

「えっと、はい。」

自分の印鑑を押す。

『桜井様ですね、こちらです。』

「ありがとうございますっ！……！」

届いたのは結構な重さのダンボール。
もちろん、実家からの荷物。

中には、大好きなうどんと、ペットボトルの烏龍茶と手紙が入っていた。

ペットボトルの烏龍茶は20本入りでうどんは5玉。

『空奈へ。』

そっちに着いて2日がたつたんやなあ、家族みんなが

毎日、空奈は生きとんかって心配しとるから、電話くらい

かけておいで。烏龍茶は渋谷さんからもらったからもろたんやけど

家は、あんた以外飲める人おらんで全部送つたるから、お世話にな
つてる

人に2本くらい渡しないな。うどんはすぐダメになるから早めに

食べないな？

それじゃあね。』

なんやねん、生きてますよ、たつた2日で死ぬわけないし
大阪を何やと思ってはるんやろ、うちの家族。

でも、うどん食べたかったし
やった

とにかく、ヒマなあたしは老人会の福引で当たった
液晶テレビ（27インチ）をつけた。

しばらくすると床においてあつたからバイブ音と着メロと共に
鳴る。鳴ったと思ったら鳴るのをやめたので、メールだと
判断したあたしは、すぐさま受信BOXを開いた。

2005/03/25

From 空汰^{カナタ}

To sorata0-0?!@dokono.co.jp

S u b R e

あほ姉元気ー？（ ）

俺、今日の昼から

大阪行くでなー。

駅まで迎えに来て（^^）

2：15に新大阪駅着くから

来て（^A^）

空汰

ん？

か？

かなた？

ん。ん。んー？

A R R O W ! ! - 5 - > つつく・・・

ARROW!! - 5 - 未

駅について弟、空汰^{カナタ}を待っていると、肩に手を乗せられ一言。

『ちよつとそこのお姉さん俺とどっか行かへーん?』

や!え?! ナンパ?!?!

「やっちよつと! ほんまに困るんで!!!!!!」

ん? この声は・・・

ARROW!! - 5 - 未

『誰があほ姉^{ネエ}相手にナンパするんよ。(笑)』

やっぱし、こいつか。

「うっさいわ! てか、急にどうしたん?」

『んー、おかんが様子見て来いって言うから来てん。
でも元気そうやし、買い物して帰ろー』

「えええええー?! せつかくご飯作ったる思ってたのに!」

『あ、泊まってってええのん? んじゃ、泊まる』

「(笑) 買い物行くんやったらあたしも行く!」

そうして、心斎橋筋へと向かった。

『俺さあ、俺の靴と服みたいねんけど。』

つい、自分の服を見てしまった。

「ああ、ごめんごめん、行こ行こ」

そんなことを言いながら 3軒目のお店を回って一休みしたら、空汰がこんなことを言い始めた。

『俺さあ、めっちゃかわいい彼女おるやん?(笑)』

「ああ、おるねえ あの、えーと嘉穂ちゃんや!」

『その子がさ、今度 引っ越すねん。東京に。』

「うん、それで?」

『結局、遠恋(遠距離恋愛)になるやん? やっぱし、会えるのもめっちゃ限られるし。相手も嫌なんちゃうかなって。やっぱり、別れた方がええんかなあ。』

「はああ?!」

『うっさいわ。』

「あかんで!! あほ姉絶対許さんでな!! そりゃ、あんたに彼女おるんは

めっちゃウザいけど、遠恋やからあきらめる?! 相手が嫌?!

カッコつけとんな!! カッコよくないわ!! 好きなんやろ? 嘉穂ちゃん。

男のあんたがしつかりせんくてどうすんねん。好きなンやったら毎日メールやら電話すればええやん!! 相手が不安になったらいっばい

好きって言うたり? わかった?」

『ん。』

「そんなことで、いちいち来たんかい(笑)」

『だってさあ、めっちゃ不安やってん。』

弟は、やっぱり自分の弟なんだなって思った。

それから、自宅にかけて地下鉄に乗って歩いて、家にかえった。

『「ねーちゃん!!! 冷蔵庫、うどんと烏龍茶しか入ってへんやん

!!!!!!」』

「あ・・・」

忘れてた 笑
どーしょー；

『ええよ、俺うどんくらいなら作れるから。隣の人とかに卵もらってきて!』

「りょーかい!」、・・・」

でも、待つて。

今、17時。家に帰ってきてるのは龍さんと友来だけ。
龍さんの家へ行ってみよう。

ピンポン

『はい』

「あ、龍さんっ／＼」

『どうしたん?』

「うえっ?! えつと、た!」

『た?』

「卵ありませんかつ?!」

『あー、卵な。はいはい、ちょっと待つてえ。』

やっぱり、この人と喋ると照れる 笑
んー、かわいいなあ（´・`・*）

『空奈ちゃん、1個しかないねんけど いい？』

「ひゃあっ？！ 全然いいです！！ありがとうございます！！」

『空奈ちゃん家、誰か居てる？』

「あー、弟が来てて、すみません、騒がしくて」

『いやいや（^^） 彼氏かと思ったけど、弟くんなら
いいや。よかったー。彼氏じゃなくて』

「へ？」

彼氏じゃなくて？よかったー？

え、それは、え？！ ちよつとええ？

『彼氏やったら、オレが困るワ。笑』

龍さんは「ほなね^^」と言って見送ってくれた（隣なのに）
え、オレが困る？ ちよつと、そんなん / /
期待しますよ（〃・`・`・`）

でも、1個じゃ足りん。よし、サルン家行くか。。。

ピンポン

「はいはいはい！！！！」

『どーも。』

「なんや、お前か。」

『なんやとは失礼な。』

「なんやねん、男連れ込んだのにこんなところおつてええん？」

『弟ですー。』

「まあ、その性格じゃ男の1人も出来んわな。」

こいつ、鼻で笑いやがった。

「んで、なんやねん。」

『ああ、卵くれへん？』

「お前、手に持つとるやんけ。」

『ちやうつて！これは龍さんにもろたん。』

「ああ、弟君の分がないってか。」

『そうですね。』

「んじゃあ、あげる代わりにオレも食べたい」

?!?!。

いや、今は冷静に 月見うどんを3人で食べるか、
何も乗っていないかわいそうな酢うどんを食べるか・・・

答えはモチロン 3人で。

『・・・んじゃあ、来て。』

「ふふふー^^」

ガチャッ

「姉ちゃん遅い!!」

『こんにちはー^^お、弟くんカッコいいなあ。これで今年中3?』

「どーも」

「あ、この人隣の人。ちょっとかわいそうやからこの人の分も
うどん作ってたって」

『かわいそうとはなんやねん、まる子』

それから、3人で食卓を囲みいただきますをした。

「えー、じゃあ友来くんは1人暮らしなんや!!」

『そうやでえ^^ 空汰も今年は受験やろー？頑張りなあ！』

「うん！ ありがとう」

それから2人は意気投合したんか知らんけどずっと夜中まで喋ってた。

サルが1匹ふえた・・・

ムカついたから、明日の朝ごはんはバナナだけにしたることにした。

翌日 新大阪駅

「それじゃあ、友来くん、あほ姉^{ネエ}ばいばい^^」

『おう、気いつけてな^^』

「ばいばーい」

8番ホーム、電車が到着いたしました。

「なあ、サル？」

『かろうじて、友来って呼んで？』

「なあ、友来ー。」

『なんやねん』

「龍さんって、どんな人？」

『龍さん？』

「うん、なんか、龍さんってわからへんねん・・・」

『龍さんは、いい人やで。』

「ふん」

『お前・・・龍さんが好きなン？』

A
R
R
O
W
!
!
-
6
-
^
続
く
・

ARROW!! - 6 - 星

あ、どうなんやろ・・・

ここで考えてしまっあたしに

折りたたみ自転車がいいので

赤い自転車を下さい。

ARROW!! - 6 - 星

『お前 龍さんが好きなン・・・?』

「・・・わからへん。」

龍さんを見ると「きゅん」ってなるし、

龍さんと喋るとめっちゃ照れるし、

これは、好きなんかなあ。

こんなことを聞いたらサルが絶対笑っから
聞くのはヤメた。そしたらサルが

『龍さんだけはあかん。』

「なんでやの？めっちゃいい人やん！！」

『なんでもええけど あかん。』

このクソザル、何やらわけのわからんサル語を話しやがった。

「意味わかれへん！　なんで？」

『お前っ！！もうええわ、好きにすればええで、』

「言われんくてもそうするわ　サル太郎！！！」

それから、無言でARROWに戻って家に入ってベランダで1人、空を見上げた。

『ここは、星がちょっとしか見えんなあ・・・』

ふと、田舎のみんなのことを思い出した。友達や家族、おじちゃん、おばちゃん　みんなのことを思い出した。そしたら、涙出てきて。ガマンしてもいっぱいこぼれて。

バタバタバタツ・・・

「お前っ、何泣いてんねん」

『うつっ、なっ泣いてへんもん。』

「ウソつけ、泣いてるやんけ」

『ちやうつて!! てか、何で人ん家 入ってきてんねん! つ・
んんん~~~~ (涙) 』

バサッ・・・

いつのまにやら、あたしは友来^{サル}の腕の中に居て、ギュってされて
そしたら、涙がまたあふれて。。

「ガマンすんな。泣け。」

このサル、空気読めるんやなあ。K Y M (空気が読めるモンキー)
や。

あたしは、泣いた。A R R O W に来て、5人の楽しい人に出会って、
家族の事なんか忘れてずっと楽しかったけど、やっぱり家族なんや
なあって

思った。龍さんはあかんってサルが言うから、なんかおかしい気持
ちに

なったんかもしれへん。

「お前には・・・」

なんかサルが喋ってるけどあたしは泣くことしか出来なかった。
声を出して、ちっさい子みたいにサルの腕の中で泣くしかなかった。

「お前には、龍さんやなくて」

あかん、涙がとまらへん。

『オレが・・・おるやんけ。』

それは、恋愛対象なんか、友達としてなんか、
どっちでもよかったけど、安心出来た。
どうも、ニブいあたしには判断がつかんかったけど
このサルは心配してくれてることくらいは
わかった。

「クソザルうううっ」

『くそざるはないやろが。』

「あほお・・・そんな優しい事、彼女に

言ったりい・・・っ」

『彼女なんかおらんわ。今はお前が大事やから
思っただけや。』

最後の方 何言ってるんかわからへんかったけど、
このサルの言葉はめっちゃ安心出来た。

ありがとう、サル。

「ちょ、もう大丈夫やから。離してほしいねんけど、サル。」

『ん・・・嫌』

「サル、ほんまにあたし泣きつかれた、眠い。」

『ん・・・ここで寝ればええやんかー』

「はあっ?!無理、あんたの腕の中つて。もう十分お世話になった
し!」

『ふー・・・』

「ちょっとサル!!!友来っ!!!!起きてえやっ!!!」

どうやら、サルは寝たらしい。寝顔かわいいなあ、まあ、もとの顔も

普通にカッコいいしなあ・・・
そんなこと考えるうちにあたしも寝た。

朝、起きたらいつのまにかサルはおらんくて、サルの家に行っても留守みたいやった。メールしたら、晴さんとアメ村行ったらしい。

メールを返信してたら、隣からすごい物音が聞こえた。

ボタン！！ドン！！！！ガッシャーン！！！！ ボテツ・・・

最後の「ボテツ」はあきらかにモノが落ちたんじゃなくて、人が倒れた音やった。あたしは急いで龍さんの家に行った。

『龍さん大丈夫ですかー?????』

「うつつ」

『うっわ、大丈夫ですか?』

「あゝ、空奈ちゃん！ うーーーーん」

『すごい鼻声ですね； 風邪ですか?』

「ん ;」

『うっわ、すごい熱。早お寝てください！！あたしやりますから！！！！』

「ありあとお
たぶん「ありがとう」って言いたかったみたい。

龍さんは、顔を赤くしてベットに入っていった。
あたしは、とにかく食べるものをまかないで作ってあげた。

『龍さん、おかゆ作ったから 食べますか？』

「んー？おかゆー？ 食べさして」

ん？？

『へ？』

「だ・か・ら、食べさしてー」

『あたし、ですか？』

「ん」

『うえっ?!』

「早くっ」

この人、すごい今かわいいけど、
そんな恥ずかしことを、あたしにさせる気が・・・

『ん／＼／』

恥ずかしいのを抑えてスプーンを龍さんの口に差し出す。
そしたら、おいしそうに笑顔で「ありがとう」って言った。
やっぱし、かわいい人だなあ。

そう見とれていると、

龍さんは何を思ったのか

あたしをじっと見ては、起き上がり

あたしの手を握って、

顔を近づけた。

ん？

A
R
R
O
W
!
-
7
-
へ
続
く
・

ARROW!! - 7 - 幸

一瞬、あたしが生きる「地球」という

丸い物体が、止まったかと思った。

まるで、「時間が止まった」かのように。。。

ARROW!! - 7 - 幸

龍さんの顔があたしの顔に近づき、一瞬「ニコッ」とあゝ、可愛い笑顔を見たと思えば、ほっぺたにやわらかいものが触れた。

『ありがとうね^^ 空奈ちゃん』

この人は、あたしの頬にキスをした。

『空奈ちゃん?』

あたしの目の前で「おい」と手を振りながら

いつもの、ジャージ姿であたしの前に座る。

「っ・・・」

『ん?』

「龍さんは、何者なんですか?」

やっと出た一言に 驚きもせず、龍さんは
こう言った。

『空奈ちゃんだけの、たった1匹のねこです。』

「ねこ?」

『うん、空奈ちゃんが悲しい時は、おれが横に座る、オレが弱った
時は

空奈ちゃんが来てくれる、オレが嬉しいときは、空奈ちゃんに甘
えて、

空奈ちゃんが嬉しいときは、空奈ちゃんの話聞いて、一緒に嬉
しくなる。

そーんな、カッコいいねこちゃんやねんな。おれ。』

この人は、ほんまに、わからへん。

一緒に居ることが、こんなにも くすぐったくて、
ほっぺたなのに、キスされたことが 照れくさくて、

何なんやろ、ほんとに。

今、あったかくて心から何かがこみあげてきて、ふわっと包まれて誰かにこれを言いたくなる、そんな気持ち。

あ、これは・・・

これは、

『幸せ』なんや。

このねこが教えてくれたんは、

これなんかもしれへん。

ふと、龍さんの目を見る。

そして、同じように龍さんの手を握って

同じように、龍さんの顔に自分の顔を近づけて

同じように頬にキスをした。

「龍さんの真似。」

「んー、その様子じゃ、まだファーストキスもしてへんな？（笑）」

「ふあっあっきあうすう?!」

「w まだまだ、子供やなあ」

さつき、『幸せ』を感じたけど、それは、『幸せ』じゃなくて、

『好き』 なんや・・・

あたしは、龍さんが好きなんや。

ちよつと顔が赤くなったのを自分でも感じて、
「んじゃあ、また明日」と言っつて龍さんの部屋を出た。
龍さんはいつもどおり「ほなね^^」と、言っつて

ドアを閉めた。

あたしは、龍さんが 好きなんや。
好きでええんや。

ほんまに、ほんまに。

好きで仕方ないンや・・・

その夜、スーパーへ買出しに行った。

1人やつたら怖いで、友来についできてもらった。
その帰り道、龍さんへの想いをつたえた。

『あたしさあ・・・』

「ん？」

『龍さんが、やっぱり好きみたい・・・』

「・・・オレはとめんで、お前が好きなんやつたら。
でも、絶対 後悔すんのはお前やで？」

『うん、大丈夫、それでも頑張る。』

「・・・なら、つっぱれ!!（笑）」

『ん、頑張る!!!!』

ARROWについた瞬間、帆奈津さんが誰かと笑っていた。

『お、帆奈津さんが誰かと笑って喋ってる!!』

「・・・ほんとや。」

『うわ、キスしてますやん・あれ誰やる?』

「どこぞのエロオヤジがお前は。」

『えー、めっちゃ気になる!!あの、帆奈津さんの彼氏やで?!!
絶対カッコいい! もうちよつとで見えるっ』

「・・・お前は あほか。」

『もうちよつと、もうちよつと・・・』

「醜いわ。」

やっこの思いで、身を乗り出し、フェンス越しに
帆奈津さんの横に居る彼氏さんの顔を見た。

『・・・・・・・・つ』

友来は、同じようにフェンス越しに男の人を見るなり、
「あほ」とつぶやいた。

見間違いであつてほしいと強く願つた

3月の終わり。

アサツテ
明後日からは学校が始まる・・・・

ARROW!! - 8 - へ 続く。

「ひゃっ?! 空奈ちゃん、友来?!」

サルは「えへへ」と頭をかいて
あたしの横に並んだ。

『帆奈津さんと・・・ 晴さん??』

帆奈津さんの彼氏は

晴さんだった。

『あたし、絶対 帆奈津さんは 蛍さんやと思ってた!!!』

「お前の恋愛に対する世界がせまいねん。」

『サルは 黙るとき。』

「うっせー サルっちゃうわ!」

「いやー、別に隠してるつもりやなかったんやけど な?」

「うん／＼／」

『お幸せに』

「なんや、こいつ 物分り早いねんな。」

『うふふー。どこのサルとはちやいますしね。』

「あほ」

何もなかったように そつと2人は
部屋に戻っていった。

ゆーか、 ナマでキス 見たん
初めて!!!!

ドラマや映画とはちやうね、りあるや。

あたしも、ほっぺた 止まりじゃ
あかなあ・・・ 頑張らな!w

目指せ!!!!!!

ちゅーしたくなる 女!

あほなこと思いながら、寝た。

「空奈 愛してんで^^」

あたしも・・・

「空奈 好きやで^^」

ありがとう

「空奈 スライムみたいやで^^」
・・・

「空奈 ブサイクみたいやで^^」
知ってるよ・・・

「空奈 あほやろ^^」
うん・・・

「空奈・・・」

なんや、あほな夢から目が覚めた。
最初の方で調子に乗らせてあとから
なんか心の声が聞こえたよ。
スライムみたいって どころ
思いついたんやろ・・・

ぴーんぽーん

うわ・・・
朝っぱらから誰やねん
ジャージやけど ええかな。

「はあああああいつ」

『おはようさん^^』

「だあっ?!?!?!」

『龍さんですヨw』

「おおよあこあいまあふ・！（オハヨウゴザイマス）」

『お、ぷうじゃ や^^ おそろいやでーw』

ぷうじゃがおそろいやったのが嬉しかったとか
どうでもよくて、寝癖つきまくり、ジャージ姿
最悪な 状態で龍さんに会ったことが すっごい
ショックで 自己嫌悪におちいった。

「どーしたんですか？」

『おお ごめんごめん^^ いやあ この前は
ありがとうねw助かったわあ ンでお礼したいなあ
って思ってw今日お兄さんと一緒に心斎橋のあたり
行かへーん?』

「・・・ ほんまですか?!?!」

やったあああああ :*.°.(´・、´) ホエ:*.°.
めっちゃ嬉しいっつ !!!
そんなん！ 龍さん と一緒にって!!

やたああああ

『ん、じゃあオレも着替えるで 朝飯食って
10時ごろ行こかあ^^』

「はいつ!?!」

やったやったやったやったあああ!!!!!!

ヤッタヨ オカアサン! (´、*)

着替えて、髪の毛巻いて、軽くメイクして
お金持って かばんもって
さっきまでの、ジャージ姿とは似ても似つかない
ほどの見た目になった。

(あくまでも 見た目。)

戸締りして、部屋の鍵をしめて、
一息ついた。

今から龍さんの隣で心齋橋歩くのが
嬉しくて 胸がきゅんってなって
顔が思わず にやつくのは、

龍さんが 好きやから。

『空一奈ちゃんっ』

わああああっ　　：＊・。

めっちゃカッコいい！！！！

だって、いつもジャージが

スウェットなのに、今日は

本当に、雑誌に載ってるように

カッコよくて、髪の毛ちゃんと

ワックスで整えてあつて。

ずっとずっと、大人に見えた。

たまに事務所に行くときは

スーツに着替えてるけど今日は違う。

カッコよさが　違う！！！！

龍さんが輝いて見えます（。。。）

「行きましょーっ」

かわいい赤い車の運転席に龍さんが乗ったから、後部座席のドアを開けた。

「あほ」

『え？』

「今日は2人やから　空奈ちゃんはオレの　よーこっ！」

あたし、隣で

いいんですか？

龍さんの車には レッチリのアльバムが
ランダムで流れている。

横とのスキマが何か大きいように感じて
何か 寂しくなってる。

この間だけでも 心臓の音が聞こえるくらい
緊張してるのに、龍さんに触れたいと

願う。

ぎゅっ……

「んっ?!」

『空奈ちゃん 喋ってくれへんねんもんっ』

なんか わからへんけど

龍さんがあたしの手を握ってて

なんか わからへんけど

龍さんが 寂しそうにこっち見てて。

いつの間にやら 駐車場についてて。

『そんなら 行こかあ』

「はいっ でも……え……」

『んー？』

「手え……」

まだつないだままの この手について
聞いてみる。

『絶対 離したらへんっ』

「ふえっ／＼／」

『そんなかわいい顔するんやもーん
つなぎたくなるわあ』

「かつ かわいくないっ」

『まあまあ まずは ゲーセン行こかあ』

いつの間にやら 恋人つなぎになってて。
いつの間にやら もっと 好きになってて。

龍さんの暖かい手の温度が 体全身にかけめぐる。

ここまで来たら 楽しもー！

あたしのペースに流したるねん。

「龍さん、 あれ行こ」

もちろん 中高生の女の子でゲーセンって言うたら
「プリクラ」 に決まってるやんっ

「ん ええよー^^」

あら、 意外とプリクラは好きなんや。

400円を入れて勝手に背景やらを決めて
とうとう 撮る段階になった。

「空奈ちゃん 早お おいでっ」

龍さんの横に控えめに 寄ると

龍さんの片方の腕があたしの腰に回って
もう片方の腕でピースしている。

「3・2・1！」

間もないうちに龍さんは慣れたように

今度はあたしの手をとって ピースする。

「3・2・1!」

それから 何枚か 撮られて
もちろん かなりの接近で。
心臓 ばくばくで ときどきで。

「次はラストショットだよー？」

『ラストがあ・・・』

「そうですねえ・・・」

『よしっ!』

「ポーズは決まったあ？行くよー？」

あたしがカメラの近くまで行ってピースしたら
龍さんが隣でカメラとは逆にあたしの方を向いた。

「3・2・1!」

ちゅっ

「龍さん、不意打ちはあかんよお。」

『ええの　空奈ちゃんやで　』

この人は、期待させるのが上手くて
人の心をつかむのが　上手い。

どうやら、被害者の１人な
あたしは　今日という日を　楽しもうと
誓った。

落書きコーナーでは　あたしが何を書くか
迷ってたら　龍さんはなにやらいっぱい
書いていて。

仕方ない、残り時間も少ないから
名前と日付と「なかよし」と「心斎橋来たよう」と
なんか　ありきたりで　終わった。
いつも　もつといっぱい書くのに、今日は
相手が龍さんで。

龍さんの書いてた落書きをのぞくと
かわいらしい字で「だいすき」とか
「ARROW!!」とか「ずうっと一緒」とか

なんか彼氏彼女みたいなこといっぱい書いてて。

「たいむあーっぶ
携帯送信する？」

あたしがアドレスを入力してたら
龍さんは アドレスを入力し終わって
次どこへ行こうか考えていた。

「お、来たあ」

『ほんまや^^ おれ 待ち受けにしょーっ。』

「あっ あたしも！」

『どれにしょーw あ、これにしょー！この赤いヤツw』

名前と、「だいすき」とほっぺにキスしてる
あの、プリを 待ち受けにすることになった。
最高の笑顔で 最高の時間を過ごした。

『よっしゃ、次は道頓堀行こかあ
おなか すいたやろ？ ご飯食べに行こかあ』

ただ、この時間が続けばいいと

そう願った。

龍さんのかわいい横顔に見とれて

龍さんの低すぎない声に

龍さんの笑顔に

また、好きなところが増えて

また、来たいなあって 思っ

ARROW!! - 9 - に 続く・

ARROW!!
- 9 -
光

それから

また、

そのサキも

また、

あなたが

あたしの

光と

なるのでしょうか？

ARROW!!
- 9 -
光

『よっしゃ、ほんなら次行こかあ
』

そう言いながらあたしの手を
つかもうとした。

龍さんの口元にはさっきまで食べていた
おむらいすのチキンライスのご飯粒が
ついている。

「あつ 龍さんっ、待って！」

『んー？』

指でご飯粒をとって、笑ってみせる。

「ついてました^^」

『ん、ありがとう。』

さっきまで、あたしの手をとろうと
待っていた手がポケットに入って。
何か冷たい口調になってて。

どうしよ・・・

そりゃ、イヤやんなあ……

「・・・ごめんなさいっ」

『ん？』

「いや、ん、だって・・・ え?!」

やっと、あたしの目を見たと思ったら

龍さんは頬を真っ赤に染めて

照れていた（、＊）

「やっぱ なんもです 行きましょーw」

今度はあたしから龍サンの手をとって歩いた。

）
）
）
）
）

龍さんの、ケータイが鳴った。

「あ、龍さん いいですよ^^ 携帯。」

『あ、ほんま？ ありがとう^^』

あたしに遠慮して、携帯を無視ったところや笑顔が、 かつこよくて、かわいくて。何もかもが新鮮に感じる。

『んー、空奈ちゃん』

龍さんがケータイを差し出してきた。それを見ると、

TO 帆奈津

S u b あほへ

空奈ちゃんと

あたしに内緒で

デートして！

龍たるも いい身分

やなあ（メA・？）

今日は入学祝ばーていー

するから、早めに

帰っておいでよー？

空奈ちゃんに

手出したら殺るヨ？笑

ばいばーい

『帰るかあ・・・』

「そーですねw」

『いやや、おれ帰りたないわ』

そう言いながらあたしに

抱きついてきた 龍さんは

また、かわいいんや。

「あたしも 帰りたくないです^^」

『だってA R R O Wに帰ったらさあ？蛭ちゃんやら

友来がおれから空奈ちゃん取ってくねんもん。
2人ともオレより話おもしろいしさあ。
せつかく空奈ちゃんと居てるのにイヤやあ・・・」

やばい・・・

何 この人・・・

めっちゃかわいいっ (/ / /)

「んじゃ、あたしを取られないように

蛍^{サル}さんや、友来から守って下さい^^」

「えー、何い？空奈ちゃんは オレがええのー？」

ちよつと笑いながら、龍さんが言うから
何かわからへんけど、さつきから、
恥ずかしい言葉が次々出てくる。

「えー、龍さんは あたしがええの？」

何 誰 あたし。

「うん、空奈が ええ。付き合って^^」

エエエエエ (. .) エエエエエエエ

くあwせrtyk j、m n f c?!?!!

「え？」

『・・・・ あほ』

龍さんが またそっぽを向くから
顔を覗き込んだら また、頬を赤く染めて

照れていた（、＊）

「あたしも、 龍さんが ええなっ
」

そう答えたら 龍さんが めっちゃ
嬉しそうに笑ってて。

あ、好きでよかったなあ って

思える そんな瞬間^{トキ}を 過ごした。

あたしより20センチくらい高くて。
ずっとずっと、届かなくて。

この想いが 届くとか 全然思わなくて。

今、

届いた。

龍さんは少し 腰を下げて

また、あたしの手を握って

また、あたしの顔に自分の顔を近づけて

今度は耳元で

「好きやで」

そうつぶやいたのが聞こえたと思えば

あたしの唇に 龍さんの唇が

重なって。

そしたら、なんかあつたかいものが

体の中を かけめぐって

涙が こぼれた。

『嬉し泣き?』

「うつっ・・・」

『空奈ちゃんの ファースト・ちゅー
いただきましたあ』

「あたしもっ・・・うつめちゃあ好きいつ・・・」

『わかってる^^ そしたら帰るかあ
皆に報告しやな!』

今、

心と心が

細く 脆く（モロ） 強い

ピンク色の糸で

今にも切れそうな

ピンク色の糸で

繋がった・・・

ARROW!! - 10 - へ つづく。

帆奈津さんが龍さんに 手をグーにして
龍さんのおなかに 一発。

「どこまで イってん お兄ちゃんに
教えてーやー」

晴さんが、龍さんに 大きな声で
耳打ちする、かろうじて 大きな声で。

「えー、めっちゃオレ、ショックやねんけどおー!!」

蛭さんが、あたしに抱きつく。
龍さんが、それをはらいのけて
無理やりあたしの隣にきて

『ん、そーゆーことやから^^』

マイペースに話を進めて
マイペースにピザに手を出して。

「まあ そんな話はナシにして
空奈ちゃん、友来 おめでとー!!」

『なしっちゃうわ! ありやよー!!』

「うっさい あほ、 んじゃ、みなさん
かんぱーい!!!」

『んー。』

「龍さん、どうぞっ」

不機嫌な顔を あの手顔にかえたくて
ビザの力を借りてみた。

『んー。』

「龍さん？」

『おれのこと 好き？』

「うんっ！」

『んふふふ（笑）』

あんまりにも、嬉しそうに笑うから
あんまりにも、かわいいから。

「龍さんっ」

思わず後ろから抱き付いた。

あたし、めっちゃスキやねんな。

「もー この2人はおいといてっ！
明日の入学式はみんなで行くでなあ」

「あ、約束したでな^^ オレ車出すわ。」

「おれ、新しい服 出そー」

「あ、でも友来と空奈ちゃんは別やでえ？
友来、空奈ちゃん チャリで乗せたって^^」

「ほーい。」

サルが元気ないなあ・・・

「あ、あたし 部屋行つて
きますねw」

「んー了解つ^^ 外暗いから
気い つけなよー」

帆奈津さんは ほろ酔いで
蛭さんは 倒れこんで。
晴さんは 飲み続けながら ピザ食べてて。

『空奈ちゃん、オレも行こか？1人じゃ危ないやろ？』

「ありがとうつ^^ でも 大丈夫ですw」

ちよつとした気遣いも 全部全部
すごい 嬉しい。

あたしは階段をかけあがつて
2階の真ん中の自分の部屋に鍵をさした

瞬間、後ろから誰かに抱きつかれた。

「やつ……」

『うるさい 静かにしろ』

サルやった。

「ちやうねん、あたし あんたが
元気ないから アメちゃん
あげようと思ってん。」

『あほか、元気じゃ。』

「てか、離してっ」

『いやー。』

「どうしたんっ?」

『なんで…… なんでッ』

ボコッッ!……!……!……!

「何してんねん!…警察呼ぶぞ!… 誰や!……!…」

『痛つたいやあ！！！』

「ん。ん？」

『オレっすよ。』

「あーあー」

『いや、おれ、友来ですわ。』

「あーなんや。」

『^^』

「て、あほか。」

『^^。』

「お前は 人の彼女に何してんねんっ！！！！」

「ちゃっ 龍さんちやうねん！ あたしが
ヒールの靴履いてて コケそうになつて！
それを こいつが支えてくれてただけっ！！」

「そう・・・なんや。」

『^^』

「ごめん、殴つて。おれ 下戻るわ」

『（、）』

龍さんが行つたのを確認した後、
サルの頭を一発 殴つた。

「龍さん 怒つてはつたやんっ！！！」

『知るか。』

「お前が悪いンやんかあ！！！」

『うつせー』

「なんや、今日 あんた かわいくないで？
いつもかわいくないけど、いつもに増して
かわいくないな。」

『あほ』

サルなんかより、ずっと龍さんが気になった。

「ただいまあ・・・」

みんな 寝てるみたいで 静かに入ると

そこには 1人で ぽつんと ベランダに立って

空を見上げる龍さんが いた。

「龍さん・・・」

「んー。あ、うん・・・」

「ごめんねっ！！ほんまにっ！！」

「あ、いやいや そんな、ええ。」

すっごい龍サンの様子がおかしい。
なんか おかしい。

「あたしが無防備にしてたからっ
ちよっと 背伸びして ヒールの
靴なんか履いたからっっ
んっ・・・ごめっっ
」

もう、あたし あかんわ。
気持ちを伝えるのが しんどい。
龍さんに 伝えようとすると
涙があふれる。

『んー、許したらんっ』

そう言いながらあたしを抱き寄せて
思いつき「ぎゅっ」ってあたしを
抱きしめた。

『・・・不安やねん』

「ふえ？」

『せやつて かわいい顔するで
友来に 取られるんちゃうんかって、
オレから離れてくんちゃうんかなって。
ほんまにつ 不安で・・・』

「・・・ 龍さんが 1番 すきやつ」

『ほんまに？』

「うつつ 好きすき好きすき好きいいいっ」

『んふふふ（笑）』

ただ、 龍さんが 不安やったのが
全然 気づかんかった自分に腹がたって。

「龍さん 好き」

『知ってるよ^^』

また、唇が重なる。

前とは違う

もっと あったかい

もっと 好きになる。

ずっと、ずっと この瞬間^{トキ}が

止まればいいと 思った。

ARROW!! - 1 1 - に 続く。

ARROW!! - 11 - 綺

マンガで 何度も読んだ

きすしーん には

程遠いけど、初めて

主人公の気持ちに共感できた。

ARROW!! - 11 - 綺

〃 〃 〃 〃

携帯のめざましアラームで 起きて

新しい 制服を着て 高校生を実感した。

今日の準備物は昨日のうちにカバンに入れたから

あとは、 サルの家に行くだけ。

『サルー おはよー!』

「ん、 おっそいねん お前は!」

なんや、昨日とは別に　すっごい元気に
なってる^^
よかったー。

「ん、行くでえ?」

『うんつつ』

友来^{サル}のチャリの後ろに乗って
出発!

今日から　こんな　日常が始まる。

『市立　小津高校　入学式　会場』

受付をさっさと済ませて　クラス表を見る。

『うそやあつ　サルと　クラスちゃうやんけえ…』

「ほんまや、お前　1組で　オレ2組や　な。」

『帰り…　迎えに来てくれへ…んよな』

「…しゃーないなあ　行ったるわ!」

『ほんまにつ?! やった^^』

「んじゃ、3年間分の送り迎え代金で 帰りに肉まんおごって」

『3年か。。。 よっしゃ わかった！！！』

「んw んじゃな^^」

『ばいばーい*』

廊下からは ざわざわと騒ぎ声が聞こえる。
今日から ここが あたしの新しい居場所。

教室のドアを開けて、入り口でもらった
パンフをもとに 自分の席に着いた。
窓際の1番端っこの一番後ろ。
この時期には とっても嬉しい場所だ。

「どこ中っ?!」

『うわっっ!!!』

急に前の子が後ろを振り返りあたしに
話しかけてきた。

髪の毛は黒と茶色がまじってて、
髪の毛 巻いてて、

「あ、ごめんごめんっ」

『あたし、引越してきてん^^』

「そっなんやー!! え、もしかして1人暮らし?！」

『うんっ^^』

「うわあ ええなあ あ、あたし田中 紗那^{サナ}！
よろしくなあ」

『えっと、桜井 空奈 ですっ^^』

「何なにー あたしも入れてえ^^」

「ええでえ 名前なんて言うん?」

あたしの隣の子がハイテンションで話しかけて
紗那ちゃんがそれを ハイテンションで返す。

「あたしは、高野 夏乃^{ナツノ} って言うねんっ！
よろしくなあw」

「うんっ、あたしは田中紗那！よろしくw」

『あたしは桜井空奈です』

「知ってるー? 2組にめっちゃかっこいい子してるの!」

「あたしには彼氏おるもん」

「あたしもW え、名前なんて言うん？」

「えーつとなあ、友来くん。中学校でも結構モテてみたいやでえ！」

おさるさんですか。

「あたし……その子と部屋隣やデ……」

「ええええええええええ？！？」

うん。

「紹介してっ！！」

ええけど・・・

なんだかんだで、入学式が始まった。

「あいさつです。生徒起立。」

やっぱり田舎も大阪も話のつまらなさは
かわらへんのやなあ　って思った。

この校長^{オッサン}鼻息がマイク通して響いてる　（笑）

帆奈津さんたちどこやるー？

あ、おつた！！

蛍さん　寝てるし

晴さん　頑張つてカメラ撮ってるし

帆奈津さん　晴さんのカメラ監督してる。

龍さんは、ネクタイをゆるめて

つまらなさそうに蛍さんのほつぺたをさわっている。

か　　　　わ　　　　い

『生徒、起立！　礼　着席！

これをもちまして、入学式を終わります。

1年生から順に教室に戻りましょう。』

入学式は終わり、帰りのSHRが終わった。

「空奈ッ！」

「あ、紗那ちゃん^^」

「紗那で　ええよ　今日、遊びに行ってもいい？」

「うんっwええよお！」

『空奈』

「ああっ・・・」

「あの子？」

「そうやねんけど・・・あ、夜でもいい？」

「うん、ええでーw 7時ごろいくわ^^」

「しめんなあ..」

「なあ、サルー」

『なんね。』

「さっきからすごい女の子の視線感じんねんけど。」

『気のせいやる。』

「いや、絶対ちゃうで。ほんまに。」

『大丈夫、みんな周りの風景を感じてるだけやから。』

「なんやカッコいいけど、それたぶん ちゃうで。」

『とやかく言うな。帰り コンビニ寄ってくでー!。』

「うーん」

~~~~~

コンビニ独特の入店時の音が不快に思えた。

あ、このヨーグルトおいしそう・・・

あ、このチョコ新製品や・・・

あ、この雑誌今日発売やった・・・

あ、いうえお。

コンビニが好きなあたしは

つついいろいろ買い込んだら

サルは、雑誌とおにぎりしか持ってなかった。

「・・・なんや、エロ本ちゃんけ。」

『あほか！　ちゃうわ！』

「やらしいなあ　むつつりかよー。」

『うつせー。これは蛍さんに頼まれた  
ふぁっしょん雑誌ですー。』

「ふぁっしょん雑誌って　（笑）」

『だあ！もう早くお前はにくまん買つてこい！  
特製のやつやでっ？！』

「うつうつうつうつうつ」

『お手。』

「あほ」

コンビニを出て、またあの  
不愉快な音が響く。

サルと何事もなかったように  
帰宅して、部屋片付けて、着替えた。

ピンポンっ

「はああいつ！」

『空奈ーっ』

「あがつてー^^」

『ありがとおw』

部屋へ案内して、お茶を出そうと思った瞬間・・・

『空奈ちゃんっ！！！！龍がなっ！！！！龍がっ！！！！』

『あほ！ちゃうねん！空奈ちゃん！オレちゃうっ！！！！』

勢いよく、あたしの部屋に入ってきた蛭さんと龍さん。

『こいつなあ！空奈ちゃんが・・・』

「あ、どーもw」

蛭さんが紗那ちゃんに声をかける。  
続いて龍さんが声をかけた。



A  
R  
R  
O  
W  
!  
!  
-  
1  
2  
-  
に  
続  
く  
。



ARROW!! - 12 - 花

花が一輪咲きました。

かわいいかわいい、チューリップです。

その花は、みんなに愛され、

耐えて、そして、生きてきたから

今、咲きました。

ARROW - 12 - 花

「なんで・・・ お前ここにおんねん。」

『はあ?! 空奈はあたしの友達やもんっ!』

「はあ?! うっせー、お前は家に帰れ!」

『なんで兄ちゃんにそこまで言われなあかんの?!』

兄ちゃん？

「ええから、今日はもう遅いし！」

『もう。今日だけで？！今度は絶対兄ちゃんの  
おらへん時に来て、いつぱい遊ぶからええもんっ』

「あほ、早お 帰れ。」

「え．．．  
兄妹？」

キョウタイ

『あ、うん。』

「んじゃ、空奈 ばいばーいっ また明日っw」

「うん^^ ばいばーいw」

「ゆーか聞いてっ！龍がな！こいつ．．．」

『だあ！もう、うつさい！』

「こいつ！ えろ本 隠してたでええっ」

『なっ！』

(。°。(。°)

「ちゃうねんっ！！ほんまにっ！！！！」

「んじゃあね おれはこれではいばーいw」

蛭さんが去っていった。

『龍さん・・・』

「ほんまにごめんっ、でもオレのやないねん！！」

『・・・』

「ちゃうねんっ、ほんまに。。。」

『でもっ・・・』

「ごめん・・・でも、信じて？これオレのやないねんて！！」

『いつ・・・』

「ほんまにちゃうねん」

龍さんが、あたしを抱き寄せようとした瞬間  
龍さんを体が拒否した。

『いやっ！！触らんといてっ！！！』

「ちょ、空奈ちゃんっ！！！！」

あたしは階段を駆け下りて、  
帆奈津さんの部屋に飛び込んだ。

『帆奈津さんっ・・・』

「ちょ、空奈ちゃんどーしたんっ？！とりあえず  
中入り？」

『うつっ・・・』

一部始終を話した。

そしたら帆奈津さんは蛭さんの部屋に行つて  
蛭さんを連れ出した。

「早く。」

「なんやねん！」

「うつさい、早く言え。」

「はあ?!」

「口答えするな。」

「龍のこと?!」

「わかってたんやったら、早く言おうネ。」

「あー、空奈ちゃん、あれ龍のやないねんw  
晴の^^; いやー、龍がさあ、オレと晴に

空奈ちゃんほんまにオレのコト好きなんかなあつて  
相談するもんやから。それで、晴がしゃーないから  
これで安心せえとか晴が渡してん、あ、せやけど  
最初は空奈ちゃんがおるからつて。断つてたで?  
んで、それを忘れてたオレは龍の部屋行つて  
えろ本見つけて、つい・・・笑  
ごめんなwでも、龍は空奈ちゃんのことめっちゃ  
好きやでっ」

「・・・」

「まあ・・・つてか、なんで晴はあたしが居てるのに  
えろ本を?」

「帆奈津があんまりヤツてくれへんつて言うてた^^」

「あほか! 高校生の前でンなこと言っな!」

「・・・えへ(´・`・\*)」

無言で帆奈津さんの部屋を出た。  
さつき、龍さんに最悪なこととしたし  
最悪なこと言っただから。

ぴーんぽーん

「ん？」

『龍さんっ』

「うせやん！空奈？！ふえ？！えええ？！？！？！」

龍さんを抱きしめて

『ごめんなさい』

「ええねんっ、オレこそほんま、ごめんなっ！

オレはあんなやらしい本の女の子より全然

1番空奈ちゃんがええからっ！！！！　ほんまやで？！」

『んふふ（^^／＼）あたしもっ』

「もう、オレのコト嫌いになっただかと思っただっ！！

よかったあ」

『龍さんちよっと下向いてっ』

「ん？」

背伸びをしないと届かない龍さんの顔に  
そっと自分の顔を近づけて キスをした。  
初めて、自分からでキスをした。

高校生1日目は

なんか、

楽しかったり

不安になったり

やきもちやいたり

嬉しかったり

初めてだったり。

ほんとによかった、

ARROWに来て。

A R R O W ! !  
- 1 3 - に続く。



ARROW!! - 13 - 淡

届く 想い

響く 気持ち

淡い ココロ。

ARROW!! - 13 - 淡

なんか、早く終わった昨日を考えると  
思わずニヤけるあたしは、重症だ。

~~~~~

4限目の国語の時間。錦戸先生は
おじーちゃん。今年で定年らしいけど
もちろんみんなは、早弁したり、トランプしたり
自由な時間を過ごしていた。

その瞬間、ダレカの携帯が大音量で鳴った。
レッチリ（コノ前 龍さんの車で鳴ってた曲）が流れた。
さすがに、先生が気づいて、

『誰ですか？早く消しましょうね^^』と、頼むから早くコノ教室から抜け出したいと言う顔をして先生が生徒を見渡す。

あたしの着信はRADやから、絶対違うと思ってノートを書しながら、2組が外でやってる体育を見てサルの姿を探した。ークラス30人弱いるから、意外と見つけにくい。

くくくくくくくく

切れたと思ったら、また鳴り響く。

『誰ですか？マナーモードじゃなくてもいいけど、授業中のマナーとして。。。』

「先生ーそんなのどーでもいいんで早く進めてくださいー」

紗那ちゃんが叫んでみんなも面白がって先生に言う。

「ちょ、空奈っ！！あんたケータイなってるで？！」

『うえ？！あたしっちゃんよ？！』

「ええから、見てみ！あんたやでw」

渋々 ポケットからケータイを取り出すと

結局 あたしだった。

でも、あたしの着信はRADだし、レッチリとか

入れた覚えもないのに。

誰からか 見ると、龍さんだった。

着信2通

ケータイを見た瞬間また、鳴った。

）

今度は、短くメールだったらしいが
いつの間にか、着信が変わっている。

2005.04.05

From 龍さん

To Ryuu|RED|ovobd!!@dokono.c
o.jp

Subject: Re:Re:

びっくりした？笑

オレの着信だけ

レッチリにしたいよ

他のコはそのままのはず^^

勉強ガンバレ（・。・）

ばいばい

はい、めちゃめちゃびっくりしました。

そんなん、いつやったんやろ・・・
そう考えてたら、いつの間にかチャイムが鳴った。

「食べるでえ」

『んっ』

「あれ？夏乃は？！」

『パン買いに行つたよー^^
誰よりも早く教室出てつたw』

「ゆーか、空奈はなんで兄ちゃんのこと
知ってるん？！w」

『あーw実は、彼氏やねん』

「うえええええ？！？！？！？！？！？」

『（照）』

「あんな、あほ兄のどこがええの？！
休みの日とか ぶうじやで過ごしてる
やろ？！そんな、こんなかわいいコ
もったいないわ！！！！」

『かわいいこつて！全然、かつこいいし
優しいし^^』

「あ、でも結婚したらあたし空奈と

キョウタイ
義姉妹やあ」

『そんなっw』

「そうなたら ええなあ」

『
^^
』

ちよつとした毎日の
ちよつとした変化が
嬉しくて、くすぐりたい。
龍さんの顔を想いだす。

〵〵〵〵〵

良かった。今度はRADだ。
なんか、今日はずっとケータイがなっている。

『もしもし』

「・・・ 死ね!!!!!!!!!!!!!!」

『は?』

「死ねって言うてんのがわかれへんのかちび!」

『誰やねんお前』

「はあ？」

ブツッ・・・

「誰え？」

『間違い電話っぽい^^』

）
）
）
）
）

『もしもし』

「消えろ」

『ええ加減にしるよ、自分。』

「うるさい、きもいんじゃ。」

『まじで、誰？』

「知りたかったら、今日の放課後
コンビニの裏へ1人で来い」

『はあ?!!』

ブツッ・・・

「なんなんやろなあ」

『うーん。ほんまにヤメてほしいわー。』

くプルルルルッ プルルルルッ

「はい」

『あ、もしもし？サル？』

「オレのケータイやのにオレ以外の誰が出んねん」

『メスザル？』

「あほかw てか 何？」

『今日、用事できてん； だから
先 帰って^^』

「りょーかい」

気がつけば、指定された「コンビニの裏」に向かっていた。言いたい放題さんざん言われたらコッチも何か言ってるってやろ、と言う 妙な負けず嫌いが、顔を出した。

『桜井 空奈だろ』

「そつやけど？」

『来い。』

普通に呼ばれて 普通についていった。

『お前、田中龍 って知ってるやろ。』

「知ってるけど。」

『別れる』

別れる？

「なんで？」

『早く。なんでもいいから。』

「意味不なんやけど、なんで？
てか、あんた誰やねん！どこで
あたしのケータイの番号知ったん？」

『龍に聞いた。あたしは、龍の元力ノ。』

意味わかれへん・・・

元力ノって なんやねん・・・

『まあ、最近中学校を卒業したひよこちゃんには
ムズカシイかあ』

あたしの前は こいつ？

『あんた、まだ龍と ヤツてないんやろ？』

やるって。

そんな

やってへんよ。

『あたしの前で、龍やばいもん。龍って
めっちゃ、ベットの上で・・・』

「うつさい！・・・！」

すごい、嫌気がさした。

そりゃ、あたしは チュウガクセイを最近卒業した
ヒヨコちゃんで。

もちろん、処女なわけで。

まだ、ちゅー しかしてへんから。

しかも、龍さんが 初めての キスした相手やから。

『ま、あんたの知らん龍を知ってるんやでってこと。』

絶対こいつの前では泣きたくなかった。
めっちゃ悔しいし、負けたみたいやん。

「もう、ええやろ、帰ってえや。」

『キスも上手いやろお 絡んでくるやろお 』

「っ 死ね」

『もしも、って思ったけど あんた胸もちっさいし
龍もすぐ捨てるで 安心したあ〜』

龍さんは、そんな人じゃない。 と思った・

でも、心の奥底では すごい心配やった。

ほんまに

ほんまに

あたしでよかったんやろか。

『別れた時は、すぐさまあたしが龍を引き取りに行くから
じゃ〜ね ヒヨコちゃんっ
』

ほんまに消えてほしかった。

それで、あいつは帰っていった。
なんか、1人で帰るのイヤで、ってか
ARROWに帰りたくなかった。
龍さんとおるのがつらくて。

プルルルルッ プルルルルッ

『・・・もしもし?』

「サル?」

『どうしたん? お前いい加減^{ハヨ}早お帰ってこいよ。』

「迎えに来て？」

『んもー絶対そーゆーことやって思った！どこやねん！』

「まるけーの裏」

『たくもー。中で待つとけよ、まあどーせもう中で雑誌読んどるんやろうけど。』

「ん。んじゃね」

『ほい。』

15分くらいして、スウェット姿で現れたサルは、あたしに向かって歩いてきて

「帰るで」と言っつて、チャリの後ろに乗せられた。

『どうしてん。』

「うつうつ・・・」

『言っつてみ？』

ただ、思うままにサルに言っつた。

ただ、コノ痛みを誰かに聞いて欲しかった。

『おれなんかに言わんと、龍さんに
そついうこと言わな。』

「でも・・・」

『ええから。言え。』

「うんっ・・・」

あとは、龍さんに言うだけ。

あとは、龍さんに言うんや。

サルに言えたんやから。

龍さんにも 言える。

A
R
R
O
W
!
!
-
1
4
-
に
っ
っ
く。

A R R O W ! ! - 1 4 - 初

また、心にひとつ

また、体にひとつ

初めてが 増えた。

A R R O W ! ! - 1 4 - 初

龍さんに 一部始終 全部話した。
思ったこと、全部 言った。

龍さんは、何も言わずそっと
抱きしめてくれた。

『空奈ちゃんは、悪くないで。
だから、自分を責めんといて な？』

「ありがとう・・・」

『あ、あとさ。』

龍さんが めっちゃ照れるから
また、顔をのぞきこむと

『そのー、。うん。』

「ふえ？」

『だからあ！俺、全然 そのー・・・』

「ええ？」

『だから！俺あんまりそんな、上手じゃないで？』

「だっ！！」

これは、あたしも照れた。

今まで泣きながら話してたから

まさか、コノ話まで言ってたとは思ってなかった。

『だから、俺はキスも、そのーええツチも上手やないし！』

「・・・」

ものも言えないくらい、照れたあたしは
龍さんが必死で 話すのを聞いた。

『しかも、そんな胸の大きさとか全然 気にしてへんしっ／＼／
空奈ちゃんは、大事やから。。。大切にしたいから・・・』

「ぷっ（笑）」

『その、だから、空奈ちゃんが、「したい」って
思ったら、その時は頑張るよ。うん？
好きやし、その。。。空奈ちゃんのことは好きやから・・・』

「・・・ したい」

『ふえ？』

「だから、龍さんと したい。」

『ええの？俺で。』

「うんっ」

『初めてなんやろ？』

「うん」

『ほんま？』

「うん^^」

『俺のコト 好き？』

首をたてにふった。

『あかん、声に出して。
俺のこと好き？』

「うん^^」

バサッ

そのまま、ベットに押し倒されて
キスをした。いつもどおりのふれるだけの。

龍さんが、制服のボタンを丁寧にはずす。
上から4つ目まで。

『今日は、こんだけにする。』

龍さんの舌があたしの首筋を這う。
そのまま、胸のあたりを龍さんが見るから
すっごい恥ずかしくなった。

「龍さん？」

『ほんまに　ちっさいな　笑』

「うわ、めっちゃ失礼。」

『うそうそ^^』

『初めて・・・　やんな？』

「うん・・・」

『ほんまに俺でええん。』

「うんっ」

正直、すっごい怖かった。
だって、そんな、初めてやし。

『大丈夫、優しい　するで。』

・・・

龍さんと、重なった。

思ったより、すごい痛くて
でも、それは、悲しい痛みじゃない。
すごい、幸せや。

好きな人と1つになった。

龍さんは、ジャージを上げて
あたしの、シャツのボタンを丁寧に
つけていった。

それで、あたしの顔を見て

『んーと。』

「？」

『目え、つぶってくださいな。』

「??？」

言われるままに目をつぶった。

唇に龍さんの唇の熱を感じて
キスされたことに気づく。

また、触れるだけ。

目を開けようとした瞬間

『あかん、まだやで?』

左手の薬指に

冷たいものが

通る。

それは、マンガでも本でも

よくある、指輪だ。

『俺、まだ弁護士でも下っぱやし、
空奈ちゃんのためにできることも
全然わかれへん。』

けど、俺、空奈ちゃんとずっと一緒に
おりたいねん。自己中やってわかるけど
やっぱり、好きやねん。』

『俺と、幸せになってくれませんか？』

「はいっ／＼／ あたしと、幸せになって下さい。」

それは、

ずっと、

中学生のとき、マンガで読んだ

幸せな、シーンだ。

今、それをただ、経験する。

龍さんと 出会えてよかった。

心にふと、暖かいものが広がる。

A
R
R
O
W
!!

-
1
5
I

に
続
く。

ARROW!! - 13 - 瞳

さて、問題です

あなたが

好きな人を

大切な人を

見たくなる「め」はどれですか？

01 眼

02 目

03 瞳

04 心

ARROW!! - 15 - 瞳

この度、高校生ながらも

籍を入れました。

まさか、自分でも……

って。まさか。そんなネ。

ありえないですよ？

龍さんは 弁護士さんですよ？

そこの女子高生と 結婚って

何を ふざけたことを……

ってわけで！

3年後

『いつて・・・ らっしゃい』

「んふふ（笑） いつて きます^^」

朝っぱらから、大阪のとある街の

とある、アパート。

その名も 「矢印」

そこには、晴さんと帆奈津さんという

お似合いの、憧れな 夫婦が住んでいます。

未永く、お幸せに暮らすことでしょう。

そのお隣には、綺麗な顔をした

プロカメラマンさんが 住んでいます。

来週は、パリへ 取材に行くらしい。

モテるんだろうな。きつと　^^

2階には、友来さんっていう　おさるさんが

住んでいます。最近、大学生になったみたいです。

とっても、とっても　いい人です。

龍さんの次に　頼れる人です。

そして、龍さんが　ペットと一緒に

住んでいます。　その名も「あたし」

って　（　。　。　！　！　）　ンな　あほな。

とってもとっても、仲良しな

夫婦が　住んでいます。

コチラも幸せに暮らしています。

そして

これから

5年後も

10年後も

ずっと

ずっと

幸せに暮らして

Φ<ΙΙΥΠ<Η<Π°

H a p p y E n d

-
-
-
-

N
E
X
T

y
o
u

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4253d/>

A R R O W!!

2011年1月15日02時38分発行